高校生の小説の受けとめ方は変わったか

ー夏目漱石「こころ」の授業からー

金本宣保

「高校生の小説の読み方は変わったか。」という問があり、「そう変わっていないのではないか。」という思いもあり、確かめたいという課題意識があった。２００４年度高等学校２年生で、夏目漱石「こころ」を教材とした授業をし、作文「『こころ』について」を書かせた。１９８６年度の高等学校２年の「こころ」の授業の記録の作文と比べたが、大筋は変わっていない。２００１年度の当校の江口修司教官の高等学校２年生での「こころ」を教材とした授業をしたときの学習者の作文と比べてみても、変わっていないものがある。「こころ」の授業では、かってと今との作品の受けとめ方はそう違っていないことを、学習者の作文によって確認した。

1　授業の展開

教科書　筑摩書房「精選　現代文」　全13時間

（1）「こころ」を通読し、感想を書く。　2時間
（2）精読　7時間
　学習者の感想の発表
　指導者の質問
　学習者の答
　指導者のまとめ
（3）　岩波文庫「こころ」を各自で読む。　1時間
　(文庫はクラスの人数分学校で準備している)
（4）　作文「『こころ』について」
　書く（構想を練る・書く）　2時間
　発表する　1時間

2　授業の要点

今までの授業と比べて指導者の意識で違ったことが一つある。指導者は次のように言った。

「この小説の三角関係は、現代では、そのまま性を逆にして読むことができる。「私」とKとがお嬢さんに恋をする。それを、自立した女性Aと自立した女性Bとが一人の男性に恋をする、という形に置き換えることができる。そういう関係は、よくあるだろう。読者は、自分が女性だからといって、『お嬢さん』の立場にとらわれて読むことはない。」

板書で図示して示した。

お嬢さん　　男性

△　→　△

「私」　K　　女性A　女性B

教科書で、「私」がKに隠して、奥さんにお嬢さんへの結婚を申し込むところまで授業をしてのテスト問題では、次のような問題を出した。これは、指導者のそこまでの授業のまとめである。

教科書「私」がKにお嬢さんへの恋について批評を求められ、「精神的に向上心のないものは、ばかだ。」と言った場面の問題の終わりに次のように問った。

問　次の文章は「こころ」の「下」の「五十二」「五十三」の一節（略）とその解説である。解説の空欄［A］～［D］それぞれにに適当な言葉を考えて、各二十字以内で書いて、文章を完成せよ。

〈解説〉

「四十・四十一」では、Kと「私」との対立が書かれていたが、ここではKと「私」との重なることが書かれている。

「四十・四十一」で、Kは、生家に反抗し、また養家にも反抗した。「精神に向上心のないものは、ばかだ。」とはKの言葉だったがそれは、自分と相手とを比べ自分は［　A　］と主張していることになる。そうして、Kは他と離れ自己を確立してきた。

「私」は、「叔父に欺むかれた」。それは不幸な事件であったが、「世間はどうあろうともこの己は立派な人間だという信念が何処かにあったのです。」そう主張することで自己を確立したといえる。近代人の自覚とは「自分は独立した一人だ」という自覚である。他人と違う自己があると自覚し、そこで、［　B　］ことになり、恋することにつながるのである。「私」が恋をしたのも、Kが恋をしたのも同じところからはじまる。Kは、さらに、友を失い恋を失った。「私」は恋の勝利者であったが、「世の中で自分が最も信愛しているたった一人の人間すら、自分を理解していないかと思うと悲しかったのです。」という。「私」は、恋において［　C　］。そ

して、「私はしまいにKが私のようにたった一人で淋しくって仕方がなくなった結果、急に所決したのではなかろうかと疑がい出しまた。」というが、この「疑がい」は「私」の「たった一人」で淋しいということにはじまっている。相手に理解してもらえるかどうかということは、「勇気」が出せるかどうかの問題でない。［　D　］を棄てるかどうかの問題である。それが「私」もできない。「五十三」の結びでは「私もKの歩いた路を、Kと同じょうに辿っているのだという予覚」にとらわれるのである。

解答　A　偉い、他人と違って生きている価値がある
　　B　孤独な自己を救ってくれる異性を求める
　　（孤独な自分と価値を共有する相手求める）
　　C　こころの重なる相手を得ることができない
　　D　自分を形成した過去を、つまり、自分

3　作文

授業の結びに作文を書かせた。書き方を板書して指示した。

- 題「こころ」
  副題（作文の内容をよく表している言葉
  　小説中の言葉でも、自分の言葉でもよい。）
- 引用
- 解説・感想

以下は作文の例である。５年C組からのもので最後の授業で発表させたものの一部である。（教科書部分についての作文２、教科書外の文章についての作文４）

句読点・漢字の用法も学習者のままである。

「指導者の短評」は、授業での発表の時に指導者が言ったことであり、「考察」は、別に加えたことである。

作文例A

題　「こころ」― 黒い光 ―

「もう取り返しがつかないという黒い光が、私の未来を貫いて、一瞬間に私の前に横たわる全生涯をものすごく照らしました」

私は授業のはじめで感想を書いた時に、「私は得をして、Kは損をした」と書きました。でも、授業を受けて自分でもいろいろ考えていると一概にそうは言えないな、と思いました。もう一度この文を読んだ時に、「私」は、死ぬまでただ黒い光の途切れる所まで歩いてきただけだと思ったのです。あの事件以来、もう「私」の心に楽しいといった感情はなく、ただそこにあるのは死へのカウントダウンだけだったのかもしれません。Kは「私」に対して一番残酷なことをしたのだと思いました。もしかしたら、Kは一番残酷だということを承知の上で自殺したんじゃないか、とも思いました。

私は「私」に同情する気持ちになりました。完全な悪人を主人公にする話があまりないように、この話も別に「私」のような人を非難しようと思って書いているわけではなく、ただ心の欲するままに書いた、そういう話だと思います。「私」という人は手紙の中ではずるくて計算高い人間として描かれています。だからこそ私は「私」に同情し共感し、この話に引き込まれました。「私」という人間は、誰もが持っている人間の暗い部分を象徴した人物として描かれていて、それは作者も持っているものなのだと感じました。

指導者の短評「授業しているうちに『私は得をして、』という考えが変わった。『誰もが持っている人間の暗い部分』ということだ。」

作文例B

題「こころ」― 後悔 ―

（引用略）

この「こころ」では、「私」はつねにKの心情をさぐっている。でもこの最後になって、Kが死んではじめて、「私」はKが理解できたのかもしれない。その瞬間に、今までの「私」の行動を後悔するスイッチが入ったのではないかと思う。結局、自分は、最初から最後まで、自分の世間体を守ることしかできなかった。Kは、奥さんから結婚の話を聞いた時から、自殺する時までずっと自分を守ってくれた。自分とKとを比較することで、Kの死の重み、Kの存在の大きさを感じる自分。それでも自分を守ることしかできない自分の弱さ。それを「私」は、お嬢さんと結婚してからも考え続け、悩み続けてきたんだと思う。せめて最後に一言でもいいから、Kから「私」を責める言葉があれば、もしかしたら「私」は自殺しなくてすんだのではないかなあと思う。「私」はKの優しさに押しつぶされてしまったのではないかな。だから「私」は、Kの「もっと早く死ぬべきだったのに…」という言葉は、Kではなく、むしろ自分にこそふさわしい言葉だと感じ、自殺に至ったのだと思う。

でも、Kはどういう意味で「もっと早く死ぬべきだったのに…」と書いたのだろう。本当は「私」を責めたくて「私」が感じ取ったように、「私」にだけわかるように書いたのかな…。だとしたら恐いな…。

指導者の短評「罪を犯した人間の苦しみをということ。Aで『もしかしたら、Kは一番残酷だということを承

知の上で自殺したんじゃないか、』 B『本当は私を責めたくて私にだけわかるように書いたのかな…。』この 二人は同じ解釈だ。指導者はいきすぎだと思うが、その解釈はどのクラスにもある。」

作文例C
題 「こころ」 ― 先生と奥さん ―
「『子供は何時まで経ったって出来っこないよ。』と先生がいった。奥さんは黙っていた。『なぜです』と代わりに聞いた時先生は『天罰だからさ』といって高く笑った。」

文庫本を渡された時、私はまず教科書に載っていた部分の続きから読んだ。最後まで読んでから、今度は一番最初に戻って読んだ。先生の言葉や行動に後悔や諦念がにじんでいるように思った。どちらかと言えば、より諦めの方が強いように思われて。先生はすべてを当然の報いだと感じている。奥さんといるところは幸せそうなのに、多分一刻だって心底幸せという感じたことはないのだろうと思う。そんな風に、途中から読んだものだから、先生の言葉のひとつひとつが気になった。

もうひとつ、後から読んだからだけれど、「奥さん」というか「お嬢さん」の名前が「静」であったことに驚いたと同時に何故か納得した。ひどくしっくりくる気がした。仰々しいというのでは決してなく、取り立てて存在感があるわけでもないが、柔らかく凛としている。それは「お嬢さん」であった時より、奥さんになってからの方がより顕著な気がした。

先生の名前は見当もつかない。「私」と同じように先生は「先生」で落ち着いている。それはKの名前にも見当がつかないのと一緒だ。

先生も奥さんも、お互いをとても大切に思っているのに幸せではない。でも、おそらく不幸でもない。けれど大抵いつも不安で、そういう状態はともすれば不幸よりも辛いかもしれない、と思った。特に奥さんはそうだ。

指導者の短評「お嬢さんの名前が『静』が、お嬢さんのイメージにぴったりだということだ。」

考察

教科書で学習して、「こころ」の全体を読むと、教科書の部分から、終わりまでを読み、そこからはじめに返って読むというのが普通であろう。それは、ミステリーの結末を読んで、はじめから読み返すことに似ているが、ミステリーの伏線（書き手の手の内）が分かるということと違った味わいがある。「先生も奥さんも、お互いをとても大切に思っている」という叙述を、「大抵いつも不安で」「辛い」人の形として読んだ。

作文例D
題「こころ」 ― Kの死 ―

Kの死―それがこの物語の転換となる。あるいは物語の神髄であると言っても過言ではないであろう。

極端に分類すると、『こころ』は半分のところで二分できる。前半部はさながら後半に記されている遺書を引き立てるための単なる冒頭のように思われる。その後半の物語のメインが、Kの死である。

ここではそのメインの出来事を取りあげて、稚拙ではある私の言葉で記してみようと思う。

この物語の主題は前述のとおりKの死であるがそんな単純な解説で済むようなものではない。Kが死ぬまでのKと「私」とのやり取りがあり、二人が住む所の管理人とそのお嬢さんの四人を中心に話が展開していく。Kとの論争、取引、Kの失恋と「私」の結婚が絶妙に絡み合って、Kの死への道を創り上げている。

Kの死後、「私」の態度は一変する。実際、Kの自殺の理由がK自身にもあることは、まず間違いないのだが、Kは「私」の心にとり憑き、「私」の心を支配したのである。ここまで言うと語弊があるかもしれないが、確かに「私」にはKがとり憑いているように読み取れる。例えば、「私」は遺書に

「私がどの方向かへ切って出ようと思い立つや否や、恐ろしい力が何処からからか出て来て、私の心をぐいと握り締め少しも動けないようにするのです。そうしてその力が私に御前は何をする資格もない男だと押さえ付けるように言って聞かせます。すると私はその一言で直ぐぐたりと萎れてしまいます。」

とある。つまり、見えない力がKの存在であり、それが、「私」を責め、ついには死の道を選ばせるのだ。しかし、そのKの存在は「私」が心の中に創り出した妄想に過ぎず、過去にしばられた「私」は、死を選ばされたのではなく、自ら死に飛び込んで行ったのである。この終焉を自分なりに納得すること、ここにこの物語のおもしろさがある。

指導者の短評「『そのKの存在は私が心の中に創り出した妄想だ。』それが『私』に取り憑いて『私』は死ぬ、という解釈は面白い。」

考察

この生徒は、発表において「稚拙ではある私の言葉で記してみようと思う。」という部分を省いた。授業中に全体に対しては言わなかったが、授業後、指導者は生徒と話した。

「なぜ読まなかった。」「発表でしゃべるべきじゃあない。」「そう。偉くなったね。」

指導者は発表時に生徒に渡す前に、そこに赤で（　）をつけようかなと思いながら、思い直してそのままで渡した。指導者の意図を言わずと理解していて誉めた。こういうかっこうよく発表しようという意識は、作文において大事なものである。それが教室の作文の質を高めていくことになる。

作文例E
題　「こころ」― 宿命という名の道標 ―
「そうしてまた慄としたのです。私もKの歩いた路を、Kと同じように辿っているのだという予覚が折々風のように私の胸を横過り始めたからです。」

よくこんな事が言われる。「人生というのは、自分の未来というものは、自分で切り開いて行くものだ」と。確かにそうだ。僕はこの考え方に大いに賛成する。自分の意志をなんらかの形で明確に持ったうえで将来を見据えるというのはとても意義のあることだと思う。でももし…、もし、自分の将来が決められているとしたら、もしくは、決められているのだと自分自身で確信してしまったら…。そんな問題を、漱石は「こころ」で読者に提起したかったのだろう。けして消え去る事のない深い暗やみを心にきざんでしまった「私」は、思い悩んだ末、これから自分は「あらかじめ決められた人生」というレールを黙々と一人で走って行かなくてはならないと気付いたのだろう。それがKと同じ死だけへつながっていることは、「不可思議な恐ろしい力は私の活動をあらゆる方面で食い止めながら死の道だけを自由に私のために開けておくのです。」という文章が如実に表している。一面恐ろしい程高く茂った草草の暗い草原の真ん中で、たった一本Kという男が造った細い道が開けている、というような情景が想像できる。これこそ「私」にとっての宿命というのではないだろうか。

作者の漱石は、精神を病んでいたというのを聞いたことがある。きっと漱石自身も不安だったのであろう。「暗い影」という表現が多く使われている事も説明ができそうだ。ただ、「私」が自殺を妻のために何度も思いとどまったという事に、決められた人生という問に対する明るい光を感じることができるのだ。

指導者の短評「暗い草むらの、たった一本の細い道一死というたとえがよい。」

作文例F
題　「こころ」　― 影 ―
「私の後には何時でも黒い影がくっついていました」

「こころ」には、「影」という言葉が何度か使われています。私が御嬢さんと結婚する時にも、「私の幸福には黒い影が随いていました。」と書いてあります。

自分の裏切りがKを死へ追いやったと考えている私にとってKの死というものは、文字通り影のように私に付いて来る、影のように黒い思いだったのだと思います。

しかし、その影を、私は妻にさらけ出そうとしませんでした。むしろ妻にだけは知られたくなかったのかもしれませんが。とにかく、私はこの遺書を送った人物以外に打ち明けようとはしませんでした。人の死という、暗く、重い出来事は、一人で背負うには重すぎるものです。しかし、私はそれをしようとし、結果、その無理が、心の変調を引き起こしてしまっていたのだと思います。

もし、このことを他の人に話していたら、その行為は私にとって大変な苦痛であると同時に、大きな助けになったのではないかと思います。私は、まわりの人々の反応について、とても悲観的な予想をしていました。しかし、それを恐れてかかえこんでしまえば自分の中でその予想がさらに悪いものとなり、よりいっそう他人に言うのが恐ろしくなり、言えなくなってしまうという悪循環になってしまうと思います

結局、私は、Kの死について公にすることなく命を絶ってしまうのですが、それを読んだ上で再び読み返した時、この「影」という文字に、Kの死という、重く、暗く、どこまでも付いてまわる思いがこめられているのだと思い、またこれ以上の表現はないと思いました。

指導者の短評「先生が自分について誰にも言わなかった理由を説明した作文だが、それは、先生が遺書を青年に書いた意味を説明している。」

発表の授業の指導者のまとめ
「みんなよく考えて書いている。一つの思い付きだけで文章全体を作っていない。特に発表してもらった１７の作文は、よく考えながら聞いてはじめて分かるものだ。論理を半歩上の段階に進めるのは大きな力が要る。
論理・思考を二段三段と展開させているのがよい。」

４　１９８６年度の授業の記録

指導者は１９８８年３月発行の広島大学附属福山中・高等学校「中等教育　研究紀要　第２８巻」に、１９８６年度高等学校２年の「こころ」の授業の記録をまとめている。その授業の記録「長編小説を読み味わう　一夏目漱石『こころ』を教材とした授業」の作文例と比べてみよう。ここでは３つ紹介する。いずれも、全文ではない。

作文例G

恋と友情のうち、微妙な手段で恋を得たものの、それにより、永久に友を失うわたくし（先生）の一生かけての人間的苦悩。「人間」というものが最低守らなければならない、暗黙の規範というものは、きっと存在すると思うのだが、すべての人間の「こころ」の中に、同じような割合で存在するとは思えない。この人間らしさの少ない人、あるいはほとんど失ってしまった人は、この小説におけるほど、こころで考え、苦悩することはないのだろうに、と私は皮肉にもそう考えた。

主題を集約できるほど、深く深く読むことをしなかった私だが、それなりにまとめてみようと思う。多面的な解釈が可能だと思うが、一番印象的なのはやはり、「先生と遺書」におけるわたくしの、普遍的人間的「こころ」の動きだと思う。「こころ」だけが、その人間のものでありながら、しかし、独立したとらえどころのないものであり、それが人間全体を左右するように思う。先生は自ら死んだのであろうが、それはまた、「こころ」によって殺された、ともいえると思う。

作文例H

二日で読み上げてしまったので精読したとは言いがたいが、大筋は人間の内にある利己主義を題材とした小説であると言えるのではないだろうか。「知識人」であるがゆえに友をだました自分を恥じ、結局はそのために自殺を決意するのである。恐らく「恋は盲目」という言葉の示す通り、いかに強い人間でも自分に対して優越感を感じるためには盲目的なことをするものである。先生は、そういう人間の利己主義（エゴイズム）を、自分の経験をもって感じ、所詮、人間とはそういう弱いものであることを悟ったのだ。世をうとみ、孤独に浸って友をあざむいた罪を償おうとする先生の姿は、「先生と遺書」の部分で明らかになるが、やはり漱石が一番示したかったのは、その苦悩する人間の姿なのだったのだと思う。

作文例Ｉ

授業を受けた後で『こころ』を読むのは、まるで犯人を知って推理小説を読むのに似ています。最初の「先生と私」の編でも、謎解きのキーワードになるというか、先生の言うさりげないセリフの一つ一つが、後の遺書を暗示しているように思えました。自分一人で最初から通読していたのでは気にもとめないような言葉が、その新聞小説一日分にも匹敵する重みを持っていることに気付きました。そのような一連の文である先生の言葉の中にはいつも、「天と私の心だけが知っている」という苦悩が隠されていると思います。私だけが知っているのなら、それをいい事に平気で暮らせる人もいるでしょう。しかし先生は、「天は知っている」というＫを含んだ天の重みを一生感じずにはいられなかったのだと思います。

先生は誠実すぎました。誠実だからこそ、自分のエゴイズムに対する自己否定を、自殺という形でしか表せなかったのだと思います。授業つまり遺書の中の「わたくし」は、人間として醜い部分がさらけでてしまった時の先生だと思います。そして先生は、一生その醜い自分と対座したまま過ごさなければなりませんでした。先生に一生そうさせたのは、先生のこころの中の「天」だと思います。

５　１９８６年度の作文と２００４年度の作文との比較

共通点

（１）小説を受け止める中心は変わらない。

１９８６年度のＧ、Ｈの「一生かけての人間的苦悩」「苦悩する人間の姿」は、２００４年度のＡ「人間の暗い部分」Ｂ「Ｋの死という、重く、暗く、どこまでも付いてまわる思い」は、同じである。

（２）教科書で学習した部分から、返ってはじめを読んだ生徒の感想は同じことを述べている。１９８６年度のＩと２００４年度のＣとは、同じ書き方になっている。

相違点

（１）作文例Ｚに見られる「知識人」という言葉は、今の高校生では、作文を展開する語として使われない。「知識人」という視点から思考することはない。

（２）２００４年度の作文例Ａ、Ｂ、Ｅについて短評でふれたことと関係するが、「先生の遺書」の文章を、あくまで「私」（＝「先生」）の書いた事と読み、そのまま事実とは解釈しない。書き手の書こうとした事と事実とを別のものとして読む。そういう読み方が、今の高校生にとって普通らしい。

この読み方は、正当ともいえるが、指導者は、「では、君にとって『事実』とは何か。」と問い返したくなる。

結論

全体としては変わらないというのことを指導者は確認した。指導者も、１９８６年以後新しく漱石について「こころ」について読み、それぞれ学んだことがあったが、授業は変わっていない。授業の中で、考えている問題、個々の事象は今のことなのだが、「こころ」という文章を学習者とともに読むということは変わりがない。いずれも、「広島大学附属福山高等学校における授業であるから。」と言う人があるかも知れない。それなら、「広島大学附属福山高等学校の生徒は変わらない。」というのが結論である。

6　２００１年度の江口教官の「こころ」の授業の作文

指導者が同じであるから、学習者の受けとめ方が変わらないのだろうかと思っていた。しかし、他の指導者による「こころ」の授業の作文を読ませてもらった時、同じようだ、と思った。当校広島大学附属福山高等学校で江口修司教官が２００１年度の２年生で「こころ」を教材とした授業での学習者の作文を読ませてもらった。確かに、指導者によって教室の空気が違うように違うところはあるが、「こころ」の投げかけるものに学習者が向き合って考えている姿は変わらない。

江口教官は授業での作文をプリントして配布したが、その中の２編を紹介する。

作文例Ｊ

（前半略）

Ｋが失恋を苦に死んだのだという、先生の憶測の根底にあることのみを前提に私が感じたことである。私はその前提にも疑問を投げかけたい。Ｋは失恋のみを原因に生に別れを告げたのであろうか、と。

「恋は盲目」とは世の常だが、先生は、Ｋの死ぬ直前にどれほど交流を持っていたというのか。心苦しさから、腹をわって語り合うことも少なかったろうし、Ｋの恋愛面以外の変化を全く気づかなかったのでは、いや、気づこうとはしなかったのではないだろうか。

私自身は、先生が後に述べているように、孤独感にＫは敗れたのだ、と考えている。生まれてからは、父母、養父母に、その後は先生に、と全てお膳立てしてもらってきたＫが、先生しか頼るところがなくなった時に、自分が好意を寄せたお嬢さんがもとで、先生を失うのである。もうどこにもこの世とつながるものがない。Ｋは恐らくそう考えたのではなかろうか。

一見、先生は、恋愛沙汰を原因に、Ｋを追い込んだかのような振りをしている。だが、気づいていない筈がないのだ、Ｋの糸を断ち切ったのが、自身の態度の変化であったことを。（中略）

人間、何を心に抱いて生きているのか、全く見当がつかない。こんな極々当たり前のことが一番心に残っているような気がする。

作文例Ｋ

こころの中の自問自答にとらえられて動けなくなる人なんてたくさんいる。そうじゃない人の方が少ないんじゃないかと思うくらい。だって心は深い。大きいし小さい気もするし得体が知れない。分からないことだらけなのに、そこから出るエゴや嫉妬、後悔に日々の喜びや恋する気持ちは私たちをいつも立ち止まらせる。さんざん悩むその瞬間、「この苦しみは永遠に続くんじゃないか」なんて思うけど、後からみれば本当にただの「一瞬」だ。まるでその繰り返しで日々が過ぎていくような…。疲れるのに結局最初の位置から動いていない。そのことにまた疲れてしまう。

こうして「もっと早く死ぬべきだったのになぜ今まで生きていたのだろう。」と死んでこころを終わらせた人たちが『こころ』には描かれている。その死が弱さなのか高尚なのか私には分からない。けど彼らは自分の心臓を破いてまでこころを守り通したみたいだ。その血を浴びてみて「いろんな形はあるけど人間は本当にこころのことを大切に思ってるんだな。」って思った。憎んでもいいくらいなのに本当お人好しなもんだ。

7　学習者は変わらない

高等学校２年生で学習する現代文の教材で、２０年前からあったものは、丸山真男「『である』ことと『する』こと」、中島敦「山月記」、夏目漱石「こころ」の３つである。丸山真男「『である』ことと『する』こと」はかっての高校生と今の高校生は違うというのが指導者の感覚であり、中島敦「山月記」、夏目漱石「こころ」の授業では、かっての高校生と今の高校生とはそう違っていないというのが指導者の感覚である。夏目漱石「こころ」の受けとめ方は違っていないということを、作文によって確認した。

現代の高校生も、近代を学習して成長していく。そういう学習を成立させるのが、「こころ」である。